

恥辱の野球部♂

BL恥辱小説+マンガ作品

夜這い悪戯②



4番☆雄星恥辱
Part.1



思春期♂野球部合宿
夜這い恥辱第2弾



南国球児

ボクと翔太

合宿 2 日目、ボク達の大石中学は
1 回戦、2 回戦と順調に勝ち進んだ。

小学校時代、
キャプテン翔太が率いたボク達の学年では、
九州制覇を果たしたこともあり、
まだ中 2 とは言え、キャプテン翔太や
4 番の雄星のいる大石中は
優勝候補の一角だった。

県大会とは言え、他中の面々も
小学校時代から顔見知りばかりだ。

その中でも特に翔太は有名人だった。

誰の目から見てもスター性が抜群だったのである。

負けていた試合の最終回、
2 アウトから同点のランナーが出た場面で
打席が回ってくると、
まさかの逆転サヨナラとなる
ランニングホームランを打ったりする。

ただの逆転ホームランよりも強烈なインパクトが残る、
全力疾走のランニングホームランによる逆転勝利……

そんな劇的なシーンを多く演出するような
スター性、強運の持ち主だった。



その上、顔も性格も良く、
他のチームからも応援されるような
カリスマ性があったのである。

万年補欠のボクにとって、唯一の自慢は、
そんな翔太と小学校時代から同じチームに所属し、
友達だということだった。

初めて少年野球（児童野球）チームに入って、
当然初心者で、何をしたら良いのか分からないまま
突っ立っていたとき、
初めに声を掛け、
そしてキャッチボールをしてくれたのも翔太だった。

それが小学校4年の時だ。

明るく爽やかで、イケメンの翔太に一瞬でハートを鷲掴みにされた感覚だった。



ボクがチームに慣れるまでの間は、
毎回キャッチボールの相手をしてくれ、
徐々に友達が増えてくると、
さりげなく身を引き、
また新しいメンバーが加わると、
ボクにしてくれたように、
キャッチボールの相手をしてあげていた。

それをさりげなく、誰に言われるわけでもなく、
自然にやっていたのだ。

そんな翔太の優しさによってチームがまとまり、
強くなったとも言える。

野球に限らずチームスポーツは、
どんなにひとり上手いやつがいたとしても
決して勝てない。

チームが一つにならないと勝てない。

小学校時代、負けていても
翔太が率いるチームでは、
『絶対に逆転出来る！』
という気持ちが沸き起こり、
また実際に最終回で逆転を繰り返し、
九州制覇まで成し遂げたのだった。

6年の時にはボクもベンチ入りし、
近くで同じチームの一体感があった。
しかし中学になると一気に遠い存在に
なっていくのを
寂しく感じていた。



小学校時代は身近すぎて、当たり前存在であり、
大好きだけど性的な興味とは違う、
親友のような対象だった。

当時の性的な興味は、大人の裸や、
自分よりも先に成長期が来て、
毛が生え始めている雄星であった。

それが中学になり、遠い存在になればなるほど、
翔太に対しての想いと、
性的な対象としての興味が
強くなっていったのである。



グランドのチームメイトの姿

試合中、応援をしている間、
出来るだけ太地とは離れた位置を取った。

あれは夢だったのだと思いたい……
しかし紛れもなく現実だ。

スタンドで応援をしながら、
翔太の凜々しい姿を見ては、
あの恥ずかしい全裸姿を思い出し、



そしてユニフォームの股間の
僅かな膨らみを見ては、
その下に隠されている、ツルツルの
驚くほど小さなおちんちん姿を
思い浮かべる。

3年主体のチームでは、
翔太と雄星の2人だけが
スタメンとして出場していた。

いつもニコニコ、おっとりキャラの
雄星だが、野球をするときだけ見せる
凜々しい真剣な表情にも
股間が熱くなった。

浅黒く、小学校時代から
みんなより先に成長期が来ていて
男らしい体つきなのに、普段のとぼけた天然
キャラ……



そのギャップがとても魅力的なのだ。



初日の2試合とも格下のチームが
相手だったこともあり、
経験を積ませる目的で
チュッパチャプス勇輝くんも
代打で出場し、
竹の子太郎の竹志くんも代走で出場した。

彼らのユニフォーム姿を見ると、
もうあの恥ずかしい姿、
そして恥ずかしいチンポを
思い出してしまう。

小心者のボクは、万が一バレたとしても
大丈夫のように、

小学校時代からの親友達である彼らを選んだのだ。

気心知れた仲間、小学校では一緒に銭湯に行った仲だ…

万が一バレたとしても許されるかも…

そんな保険を掛けていたのである。



ボク達学年の自慢の4番である雄星に関して言えば、予期せぬ口内射精を喰らい、精液を飲んでしまったのである。

あのデカく真っ直ぐな雄星らしい肉棒。

雄星の見た目通りのエロいチンポ…

なのに先っばまですっぽりと完全に被った真性包茎ちんぽがさらなるエロさを引き立てているように思えた。

炎天下での2試合、翔太は内野ショート、雄星は外野ライトでフル出場だ。

相当疲れているはず……

今夜もまた悪戯出来る……

本来なら只々そういう幸せな気持ちで夜を迎えるはずだった。

それがあの太地に知られてしまったことによって
自分では制御不能に陥ってしまったのである。

芽生え始めるドMの性癖

応援中、そして試合の合間、弁当を食べるときなど
元々普段から絡むことなど無かったのだが、

異常に太地の動向が気になって仕方なかった。

一方、こちらの反応とは違い、
太地は不思議なほどいつも通り変わらない。

もしかすると太地に見つかってしまった出来事だけは
夢だったのか…？

そう思いたくなる。

だがあれが夢で無いことは
朝のトイレで、ボクのお尻から排出された
白濁の物体が物語っていた。

その白濁の塊を見たとき、
幽霊部員で格下に見ていた太地にケツを掘られ、
そしてケツの中に射精されてしまったのだと気付いたのだ。

悔しい…

よりによってあんなデブの陰キャラ野郎にケツを掘られるなんて…

端から見れば、
ボクも十分に陰キャラと変わらないだろう。

それでも太地よりは友達が多い。
部活が終わった後、近くの漁港で釣りに行ったり、
栈橋から海に飛び込みをしたり、
そうやって遊ぶときのメンバーには入っていた。

だから自分の方が格上だと勝手に思い込んでいたのだ。

格下の太地にケツを掘られ、体内射精までされた悔しさと同時に、

そんな自分の惨めさを想像すると、
感情とは別で股間が熱くなり、
ビンビンに勃起してしまう自分に戸惑った。

気持ちはとても惨めで、
悔しさ、そして怒りの感情も込み上げるのに、
股間はビンビンに反応し、そしてケツが疼き、
カラダ中がなんとも言えない快感に包まれるのだ。

ときどき気付かれないよう太地をチラ見する。

あのだらしない体型、不細工な顔つき…

ただ、小学校時代のスーパー銭湯での
フルちん集合写真に撮された
太地の異常にデカイチンポが頭に浮かぶと、

『あのときで、あのデカさ……
なら今はいったい……』

そう頭に浮かび、自然と太地の股間の膨らみに視線が向いてしまう。

すごくモッコリとしてデカイのが見て取れた。

コレまで気にしたことなど無かった
太地の股間の膨らみが気になってしょうが無い。

自分のケツの処女を奪ってしまったチンポ……

いったいどれほどのモノが突っ込まれたのだろう……

そう考えると、これまでに感じたことのないケツの疼きを憶えた。

気を失うように寝入ってしまった後、
太地は30分以上も掛け
じつくりとボクのケツを解し、
ケツマンコへと開発していたのだが、
そんなことなど知るはずもなく、
無意識にカラダに覚え込まされた快感によって
太地のチンコが気になってしまっていたのである。

そうやって、ときどき意識を太地に持って行かれたが、
やはりずっと一緒に野球をやってきた仲間達の応援で
あっという間に時間が過ぎていった。

2試合に勝利し、ミーティング後、
ボク達補欠組は、1年の後輩達に指示しながら
道具を学校車に積み込んでいた。

その時だった、誰も居ないハズの背後から
突然ケツの穴を舐めるような指使いで撫でられた。
そして耳元で囁かれたのだ。

「昨日は気持ち良かったね…。
今日はもっと気持ちいいことしようね…」

ケツへの思いがけない快感にカラダ中の力が抜けると同時に、
サーッと血の気が引くのを感じた。

ハッと我に返り後ろを振り返ると、
太地はもうすでに背中を向け、離れた場所にいた。

その後ろ姿に戦慄を覚える。

忍者？暗殺者なのか…？

完全に気配を絶って背後に忍び寄り、
誰にも気付かれないようボクの
カラダ（ケツ）にスイッチを入れ、
メッセージだけを伝えていった。

怒りや悔しさの感情よりも、恐怖の感情の方が強かった。

『オレ…どうなっちゃうんだろう……』

そう思いつつも、カラダが憶えているケツと、
その奥への快感が蘇り、
股間はビンビンにフル勃起してしまうのだった。

3日目の夜…全裸・粗チンのボク

その日も2日目と同じく翌日の試合に備え、
ササッと入浴を済ませ、夕食後は軽いミーティングをして
直ぐに就寝時間になった。

それでも楽しい合宿、
また2試合勝ち進んだという興奮もあって
みんなテンション高く、しばらく騒いでいた。

そして監督がブチ切れて怒り、部屋を暗くすると、
皆、それまでのテンションがウソのように
あっという間に眠りに落ちていった。

夜の10時45分から電気を消し、

10 分もしないうちに勇輝くんのイビキや、
他のメンバーの寝息が聞こえてきた。
朝は 6 時起床である。

夜這いをするためには最低でも 30 分以上は待たなければ……

そんなドキドキと、太地の出方が気になって
その待ち時間がとても長く感じていた……

…トントン、ユサユサ……

肩を揺らされ目を覚ました。

不覚にもいつの間にか寝てしまっていたようだ。

そこにはもちろん、太地がいた。

もう太地に対する嫌悪感は薄れ、
不思議と同志を得たような心強さすら感じていたのである。

そんな吹っ切れたような気持ちで起きると…

なんとボクはすでに一人、全裸姿にされていた。

「うわ！」

その予想外の自分の恥ずかしい姿に
思わず毛布を掴み股間を隠すのだが、

そんな様子を太地は不思議そうに、
そして少し笑みを浮かべ、ボクの目をジ〜ッと見つめた。

その無言の眼差しが

『今さら何を隠しているんだ？』

そう語っていた。

自分のおちんちんに目をやると、
人に見られたくないほど粗チン状態になっていた。

そしてジメツと濡れていた。

（恐らく唾液の）気化熱によって
冷えて縮んでいることが分った。

熟睡モード中、ボクは全裸にされ、
そして太地にちんぽをしゃぶられていたのだ。

もしかすると、フェラ射精させられた後だったのかもしれない……

「寒いから着てもいい…？」

「うん、上だけね。」

何を考えているか分らない、
いつもの表情でそう答えた。

ボクは傍らのTシャツを手に取り着込もうとしたとき、
お尻の穴がヌルッとしているのに気付く…

『ああ……もうケツに何かされたんだ……』

そう思うと肛門が疼き、
その奥に何か分らない
ジワ〜ッとした熱さが広がるのを感じる。

気を抜くと勃起してしまいそうだが、

僅かに残されたボクの自尊心が、

勃起を辛うじて抑え込んでいた。

「雄星君からね！」

主導権を握る太地は小さく囁いた。

自分だけ下半身丸出しのマヌケな姿……

まるでボクは太地のペット、奴隷のような立場で、
市中をおちんちん丸出しで連れ回されているような、
そんな惨めさを感じる。

それなのに、その快感に堕ちていく自分自身を自覚し始めていた。

雄星の恥辱 part 1

雄星は昼間、大活躍だった。

いつも得点頭で、ボクらの学年の頼れる4番だ。

先輩達のチームでも勝負強さは変わらず、
今大会だけで言えば打率は8割である。

そんな野球の時の表情からは想像出来ないほどのマヌケな寝顔、

だがそんな表情の中に、野球部の男の子らしい豪快さも垣間見える。

昨夜とは違い、横向きで寝ている雄星…

脱がすのは難しそうだ……

そう考えていると、太地は何のためらいもなく、
雑な手つきで脱がし始めたのである。

ボクは慌てて太地に合図を送る。

『そんな乱暴に脱がしたら起きちゃうよ！』

声を出さず、ジェスチャーだけでそう伝える。

「大丈夫…。雄星は一度寝たら絶対起きないから…！」

そう小声で伝えてきた。

？

慣れてるのか…？

下半身丸出しでキョトンとしているボクをよそに
ササッと雄星の下半身を露わにってしまった。

カッコいい雄星……

昨日とは違った態勢、横向きで
おちんちんがタランと垂れ落ちる姿がとてもエロい……

「竜太君、カメラ…！」

太地がそうつぶやき、ボクはハッと思い出したように
デジカメを取り出し、
雄星の恥ずかしいおちんちんのドアップや、
恐れを知らない太地が遠慮無くまくり上げた
上半身の裸姿までを収めた
全身の姿をカメラに収めていく。

「次は、ケツの穴…！」

そう促され、雄星のケツの方に回り込んだ。

雄星のケツの穴が見れるなんて…ハアハア…

もう興奮ですでにフル勃起してしまっていた。

太地はそんなボクの恥ずかしい姿を観察するために、
下半身は丸出しのままにさせて置いたのだと思った。

ボク達学年で、一番
野球部っぽいカラダつきが発達した雄星の裸体、

何よりそのケツの大きさ、
美しさが男らしく、大人を感じさせる。

そんな雄星のデカイケツを撮影し、

そして目的の肛門の撮影に移った。

スゴイ…ケツ毛が…

金玉袋にも少し陰毛が生えている雄星…

肛門周りには、
エロいケツ毛が生えていたのである。

当然、ボクにもケツ毛は生えていたのだが、
普段気にしたことも無く、
薄く、そもそも見たことも無かったため、
肛門周りに毛が生えるなんて
知らなかったボクは、

そのケツ毛のエロさに
チンポが更に硬くなり、
先走りがダラダラと垂れ落ちていた。

ボクがカメラを構えると、太地は雄星のケツをグイッと左右に広げ、肛門の中を見せてくる。

反射でキュッと締まっていた雄星の肛門が、次第に力が緩み、開きっぱなしで奥の肉の色が見えてきた。

雄星の肉の色……

パシャ！パシャ！

何枚も撮影すると、

「見ててね…」

太地がそうつぶやき、突然雄星のケツに顔を近づけたと思うと

ペロリ！

ペロペロペロッ！

ペロペロ！

雄星のケツの穴を舐め始めたのである。

そしてタツプリと雄星のケツの穴を濡らした後、指先で雄星の肛門の周りを優しくなで回し、ときどきクリクリッと肛門の穴へ刺激し始めたのである。

「前（ちんぽ）見てみて…」

太地の指示に従い雄星のチンポを見てみると、反応し、大きくなり始めていた。

ボクのケツも疼く…

そう、ケツの穴を刺激するとキモチイイのだ…

その勃起し始めた雄星のチンポをカメラに収める。

次に太地は準備していた容器を手にとると、
透明なトロツとした液体を指に塗りつけ、
それを使ってさらに雄星のケツの穴へマッサージを始めた。

『いったいコイツ…』

あまりの慣れた手つき、変態的な知識に圧倒されるボクは

4番バッターの雄星のケツの穴が
透明なヌルヌルの液体によって解きほぐされる様子を
黙って見守るしか無かった。

クチュクチュクチュクチュ…

ズボっ！

クチュクチュ…ズボ！

その透明な液体の潤滑性能によって、
ついに4番雄星のケツの穴に
（陰キャラ・デブ）太地の
太い指が差し込まれてしまった。

ゴクリ…

さらに、指にヌルヌルローションを追加し、
一度侵入を許し、楽に奥へと差し込めるようになった
雄星の肛門に
ズブズブ、ヌルヌル、ズブズブ…、クチャクチャ
と、奥へ奥へと器用に指を回転させたりして
抜き差し続けるのである。

スゴイ…

そんな慣れた手つきで同級生のケツの穴を
自在に解し続ける太地…。
そのテクニックに圧倒されていると、

「前、見てみて…」

そう促され雄星のおちんちんを確認する。

なんと!!
フル勃起しているのである。

ス…スゴイ…ケツの穴だけで勃起させてる……

「見ててね…」

そう言うと、太地は雄星のケツの奥に指を突っ込んだまま静止し、
グイグイッと動かした。

すると、ビンビンにフル勃起した雄星のチンポが

ビクンビクン!!

と力強く動くのである。

そして先っぽからは快感の先走り液がダラダラと垂れ落ち始めた。

ゴクリ…

もう我慢出来ない…

そんな表情を読み取ったかのように

「しゃぶって良いよ。」

そう促してきた。

ボクはもうためらうこと無く雄星のチンポを口に含んだ。

すでにビンビンにフル勃起し、
先っぽからはダラダラと先走りを垂れ流す雄星のチンポ…

圧倒的な美チン、太くたくましく、
真っ直ぐな雄星らしいチンポだ。

口に含んでペロペロと舐めまわし、
今日も雄星の精液が飲みたい…
そんなド変態な願望が沸き起こり、
チンポがビンビンに熱くなる。

舌先で雄星の余った皮の先っぽを
ペロペロと舐めまわす。

オシッコと先走りの混じったツーンとした
独特な味がする…

ボクがしゃぶっている間、
太地はずっと雄星のケツの穴に指を突っ込み
優しく、時に激しく解し続けているようだ。

時々グイッと押し出すように奥を刺激すると、
雄星のチンポが気持ちよさそうにグイッと膨らみを増すのを感じる。

「竜太君、射精はさせないでよ、次があるから…」

そうつぶやく。

次？

何言ってんだ？

オレは雄星を射精させて、精液を飲みたいんだよ…

そう思った時だった…

ドぴゅ！ドぴゅ！ドぴゅ！ドぴゅ！

雄星の射精は突然訪れた。

なんという早漏だろうか！！

ボクがしゃぶり初めて、
まだ1，2分も経っていないというのに…！！

たいして刺激したわけでも無い…

雄星は突然のお漏らしのように
なんの前触れも無く、
急に射精してしまったのである。

驚いたボクは、雄星の射精を太地に伝えるべく
合図を送った。

「え？…あちゃ～、もうイっちゃったの……。

雄星すごい早漏だ…

このタオルに出して良いよ…」

太地はそう言って首に掛けていたタオルを差し出した。

ボクは口に含んだ雄星の大量の精液をタオルに吐き出すべきか、
少し悩んだ…

とりあえずその味を確かめるように舌の上で転がして味わう。

土の匂い、グランドの芝生の匂い、雄星の臭いグローブの匂い…

そして雄星の男らしいオスの汗臭い味…

それら全てを妄想させる濃い精液……

陰キャラ、補欠組のチームメイト2人に、
ケツの穴に指を突っ込まれて悪戯され、
そしてチンポをしゃぶられて
一気にお漏らしするように射精してしまった、

早漏、巨根の4番バッター雄星…

マヌケな幼さも感じさせる寝顔、
恥ずかしい早漏っぷりに魅了される。

ゴックン！

友達の精液を飲み込む変態っぷりを見られたくない…
そんな変態っぷりを知られたくない…

でも我慢出来なかった。

雄星の大切な精液を飲み込むことで
特別な一体感を味わえる気がしたのだ。

「え？飲んじゃったの…？」

友達の精液を口内射精され、まさか飲み込むという
変態っぷりに哑然とする太地だったが、
すぐにニタ～ッとイヤらしい笑みを浮かべる。

「竜太君……やるね…」

そして射精して少しずつ萎み始める雄星のチンポを見つめ、
何か考えている様子で、

「…ま、いっか…、雄星は精力旺盛だからまたすぐ勃起するし…」

そうつぶやくと、ボクを手招きして雄星のケツの穴を指さしてきた。

見てみると、ずっと指を差し込まれていた雄星の肛門は
ぱっくりと大きな口を広げ、パクパクとエロく蠢^{うごめ}いているのだ。

肉の存在が奥までハッキリと確認出来る。

ボクはサッとカメラを手に取り、その肉の色が
しっかりと記録出来るようパシャパシャと撮影した。

「入れていいよ…」

「え？」

「竜太君、雄星好きでしょ？」

その言葉に思わず声が出ない…

「解したから直ぐ入れられるよ。」

驚いて何も言えないボクのフル勃起したチンポに
ヌルヌルの透明な液体を塗り込んできた。

あっ…思わず声が漏れそうになる……

「ボクのチンポ入れたいけど、
デカすぎて、雄星のケツが裂けちゃったら、
明日の試合で困るでしょ？
だから竜太君が掘っていいよ。」

そう言って、冗談っぽく笑う。

ゴクリ…

このカッコいい4番打者のケツの穴に
ボクのチンポを差し込む……

もう理性はとっくに吹っ飛んでしまったボク…

目の前のぱっくりと開いた、
大好きな雄星のケツの穴…

生々しい肉の色がなんともエロく誘惑してくる…

僅かに残されたボクの自制心…
雄星の寝顔を見て、
様々な思い出のシーンが脳裏をかすめる。

この一線を越えてしまえば、これまでの友情の日々が壊れてしまい、
もう戻って来れない気がした。

そんなボクを煽るように、

「ほら見て、こんなにズボズボって、もう4本指でも入っちゃう…
こんなにガバガバに出来るなら、そのうち拳も入りそうだね…
雄星の赤いバットをズブズブ入れちゃおうか…へへへ…」

そう言って、ローションでヌルヌルの指3～4本を
ズボズボ乱暴に抜き差しするのだ。

それには堪らないという感じで、
もがきながら、少しずつ雄星は逃げているのが分かる。

だめだ、これ以上雄星のケツを太地に乱暴させるワケにはいかない…！

太地は戸惑って固まるボクを煽っていたが、
これ以上、指をズボズボすると雄星のケツが壊れてしまうと
思ったのだろうか？

ローションを小分けしてきた容器をズボッと
差し込み、ボクの反応を見てきた。

指4本をズボズボされるよりは幾分マシな大きさにホッとする。

そのケツにずっと差し込まれた異物を排出しようと
ヒクヒクと動く肛門がなんともイヤらしい…

もう我慢の限界だった。

この邪魔な容器をゆっくりと抜きとる。

すると、ポッカリと口を開いたままの
ボク達の4番、雄星のケツの肉壁がヒクヒクと蠢く様子が丸見えだ。

太地のマネをするように、ヌルヌルと垂れ落ちるローションを指に絡め、
可哀想に、開ききって閉じなくなってしまった
雄星の肛門を撫でてみた。

びくびく！びくっ！！

ほんの少し撫でただけなのに
雄星はケツを浮かせ、
悶絶して来たのだ！

エロい…！

雄星もボク同様、太地のテクニクによって、
ケツが性感帯に開発されてしまったのか!?

そんな小学校からの大切な友達のケツに
ゆっくりと、
ボクの粗チンポを差し込んで行く…

『ごめん…雄星…、ごめんね…、でももうボク我慢出来ない…』

頭の中にはこれまでの思い出のシーンが走馬灯のように
駆け巡った。

もう戻れない…

ああ…、雄星…あったかい…

ケツの中、体内に侵入してきた異物を排出しようと
一気に雄星の肉壁がボクのチンポを包み込み、
ぐにゅ～ぐにゅっ！と圧迫し、排出しようと
締め付けてきた。

あ…ああ…ダメ…そんなに締め付けたら…
あああ…あっ!!

どびゅ！どびゅ！どびゅ！

…なんということだろうか!!

差し込んで数秒、恐らく3秒もしないうちに…

脳裏に様々な思い出のシーンが駆け巡り、
そして涙を流す雄星の横顔が目に入った瞬間、

雄星の温かく、そして全方位から優しく締め付けてくる
肉壁の刺激により、一瞬で射精してしまったのである…!!

一気に罪悪感が襲ってくる。

頭が真っ白…

雄星のケツに差し込まれたまま、
徐々に柔らかくなり、締め付けられ、押し出され…

排出されていくボクの粗チン…

予想外のスピードで射精してしまったボクの様子に
哑然として、驚いた表情の太地…

「え…？まさか、イっちゃったの……竜太君…？」

雄星の体内に自分の精液を射精してしまうなんて…

後悔、
友達を裏切ってしまったという罪悪感に襲われ、
涙が出て来た。

ボクは泣きベソの表情で、太地の問いにコクリとうなずいた。

「スゴイね……
でも仕方ないよ、初めてはそんなもんだよ…」

ボクの気を知ってか知らずか、慰めの言葉を掛ける。

そして小学校からのチームメイトに夜這いレイプされた
雄星の態勢を整える。

服を着せるのか……？

射精後の賢者モードに突入し、

もう終わりたい……

そう思っているボクに雄星のケツの穴を見せ、

「ほら…、雄星のケツから
竜太君の大切な精液が排出されてる…へへへ…」

恥ずかしさと怒りのような感情が一瞬込み上げた。

賢者モードのボクには、もうそんな煽りトークは効かないのだ。

これ以上、ボク達の大切な友情を壊すのはやめてくれ…

そう思っていると、太地は予想外の大胆な行為に出た。

もう雄星が寝たふりを続けているのは
誰の目にも明らかだったが、
だとしても、
驚くほど大胆に雄星の両脚を持ち上げ、
チングリ返しの態勢にしまった。

そしてパクパクと^{うごめ}蠢き、
必死で元の大きさに戻ろうとしながら
ボクの精液を排出する肛門を天井に向け、

ペロペロと舐め始めたのである!!

あり得ない…

これ以上…?

太地は一体何をしようというのだろうか…?!

雄星♂恥辱 part 2 へ続く

あとがき

今作品は、小説＋マンガという新たな試みで制作しました。

恥辱の野球部♂夜這い悪戯シリーズ第2弾です。

好評の①の続編として、すぐに小説は書き上げましたが、挿絵を描くうち、ほぼマンガとして出せる枚数になり、小説はボツにするか悩みましたが、

前作の小説部分の続きとしても楽しんでもらえ、また、小説作品が苦手な方には、マンガ作品として楽しめるよう、今回のような仕上げとなりました。

南国球児作品のコンセプトは、登場人物達への感情移入、そして、シチュエーション・フェチなので、その点でもシリーズとして良い感じになって来ました。

今回のターゲット、柴犬顔の4番、雄星ですが、ドMの彼がいずれパイパンになって公園で露出素振りをするようになるエピソードは今後の展開をお楽しみに(^^ゞ)

次作は、他のメンバー達への恥辱悪戯も描いていきます。多分…

キャプテン翔太への恥辱のゆくえは…？
そして不思議キャラの太地と翔太の関係も今後の小説で描いていきますのでお楽しみに(^^ゞ

2020年6月 南国球児

ブログで作品の情報発信を行っております。「南国球児 ブログ」
感想、コメントなど頂けると励みになります！ nangoku.kyuuji@gmail.com

恥辱の野球部♂夜這い悪戯②



県大会初日
ボク達のチームは
2試合連勝

南国球児

竹の子型
ちんぽ♂竹志

チュッパ♂
勇輝くん

中3ベンチ

生涯童貞



スイッチヒッターの
翔太は、苦手コースが無い。
右と左と打ちまくり、
大事な場面で
打席が回ってくる。

小さいカラダから
自由自在に繰り出される
ヒット、俊足、守備の良さ
3拍子そろった選手

童顔のイケメン
ムードメーカーであり、
小さなカラダが一回り
大きく見えるオーラを放つ



小学校で九州制覇した
チームのキャプテンとして
県内では他の中の上級生にも
知られた存在だ。

こんな可愛い顔して
オナニーしてるんだよな…
脱がして見て！

翔太君
可愛いな…

3年

2年

タイムリー
2ベースヒット



キャプテン翔太
遠い存在になると
いつの間にか性の対象として
見るようになっていった。



フフフ…
なんだコレ…!
これがキャプテンの
ちんぽ?
ぶぶ…フフフ…



雄星

カメラを向けると
照れながら
ポーズを取る。

カンフーパンダ

翔太

ユウキ君



父親譲りの
ユーモアもあり、
少し天然で抜けた
部分も翔太の魅力だった。

小5の頃

仲間思い、どんなときも
ポジティブ。
欠点など見つからない
完璧なキャプテン…

そんな人気者の翔太を
ボクは穢してしまうのだ…

恥辱の野球部♂ 夜這い悪戯



南国球児

今回のターゲット
ボクら学年の4番
柴犬顔の雄星

誰よりも多く
素振りを繰り返す。

雄星が素振りを始めると、
その真剣な表情に
誰も近づけない。

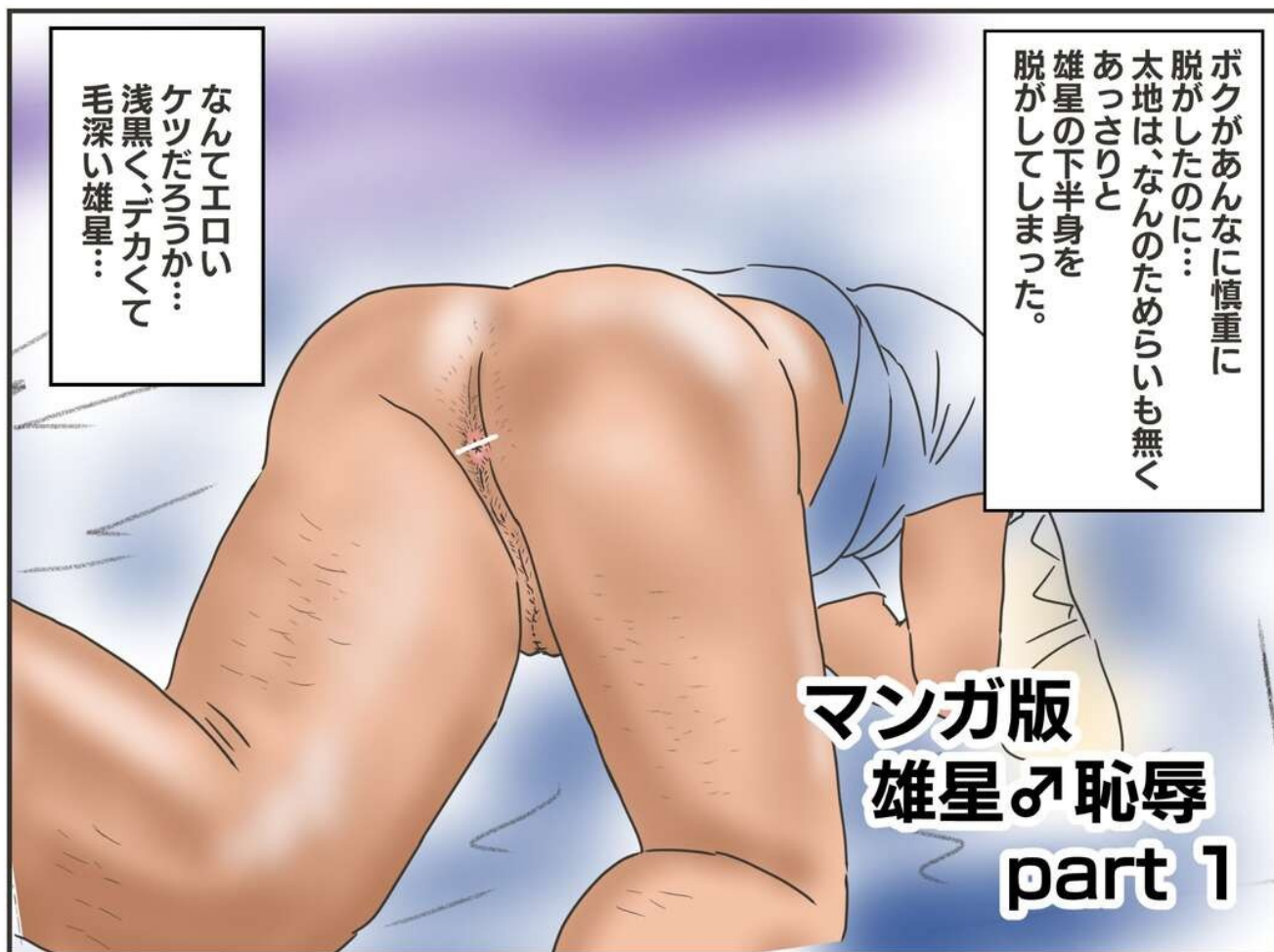


そんな真剣な姿を
見ても、ボクの脳裏には
雄星を裸にして恥辱して
しまうのだった。

あのデカイ包茎チンポ…
きつとユニフォームの下、
ぶらんブランと
揺れているだろう。

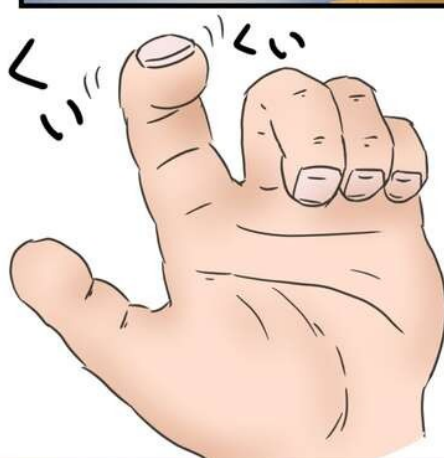
イグッ
イグッ
イグッ







雄星のケツの穴を
ペロペロと舐めまわし、
そして指を突っ込んで
刺激する太地...

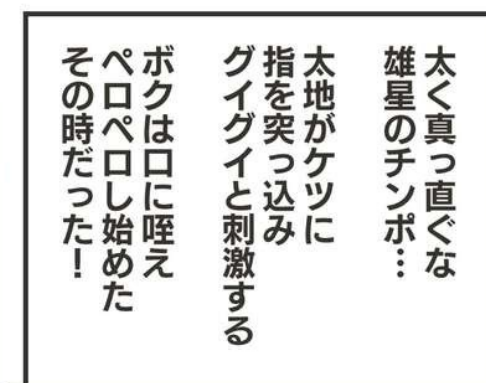
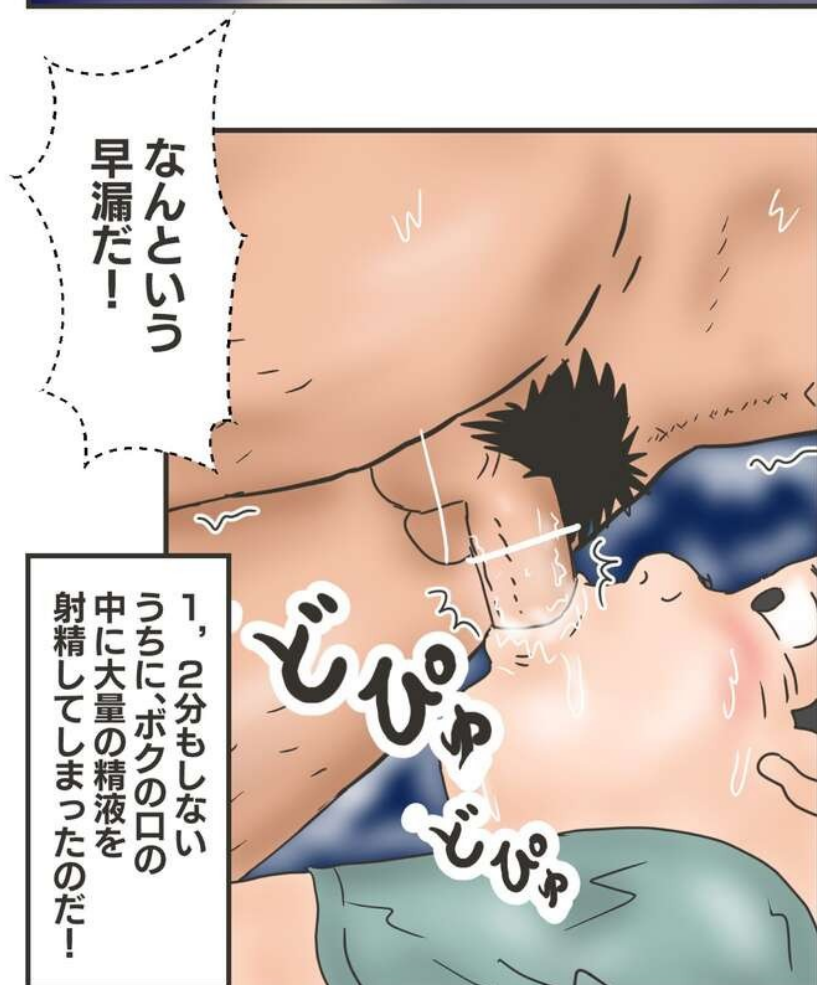
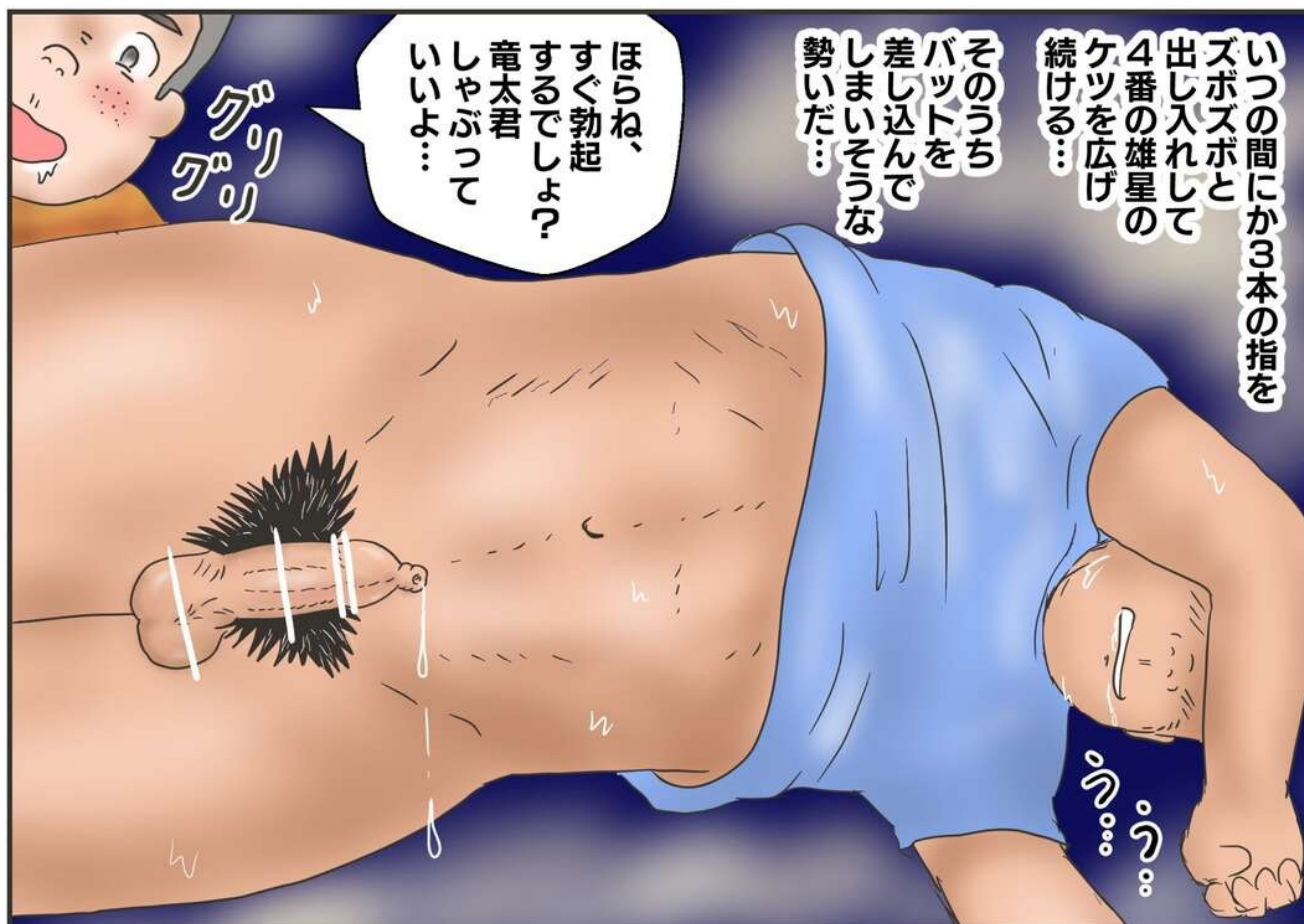


見ててね
雄星はケツの穴
刺激すると
すぐ勃起するんだ...



初めは1本だった指
気がつくと2本の指を
ズボズボ深く突っ込み
回転させて解していく

ケツに指を突っ込まれ
逃げるように態勢を変える雄星
しかし容赦なく太地は
グイグイと指を突っ込む

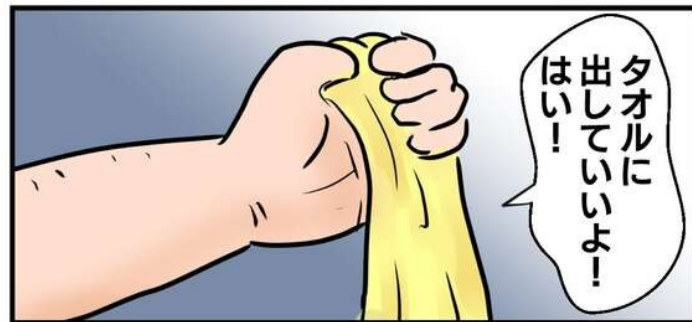




昨日は突然のことで
思わず飲み込んだが、
今回は口の中に
大量の精液が溜っている...



え?もう雄星
いっちゃったの...?
すごい早漏...



口に溜めていると
吐きそうだ...
男らしい雄星らしく
濃くて大量の
精液...
友達の精液を飲み込む
姿なんて見られたくない...
しかし雄星のたくましい
寝姿を見ていると
我慢出来なかったのだ...
ゴックン...



寝たふり雄星の
耳元で、わざと
聞こえるよう
つぶやく

ほら見て
じっくり
解したから
もうぱっくり
開きっ放し

へへへ…
さっきは
指3本も
ズボズボ
しちゃった…

もっと時間掛けて
拳が入るくらい
開発しちゃうかな

雄星のケツに、
竜太君のチンポ…
入れてもイイよ

雄星の処女
竜太君がもらって
あげてよ…

雄星の処女…

ボク達の4番のケツマンコ…
こんなにデカいチンポの雄星を
補欠で粗チンのボクが
処女を奪う…

ほら、こんなにズボズボ…
雄星はケツの穴刺激すると
気持ち良くて、すぐ勃起するよ…

粗チン少年
フル勃起で
9cmちよい…

ホームランを打った
頼れる4番の雄星



小学校からずっと
憧れの4番バッター

みんなより先に
成長期が来て
一回り大きなカラダ



野球をやっているとき以外、
いつもニコニコ
何をやっても怒らず、
いじられキャラだ。
成長が早かった為、
中1では
他小出身の
メンバー達に
着替えの時、
ちゃんぽも観察
されていたが
ある時期から
急に下ネタを
受け付けなくなった。

<<<...>

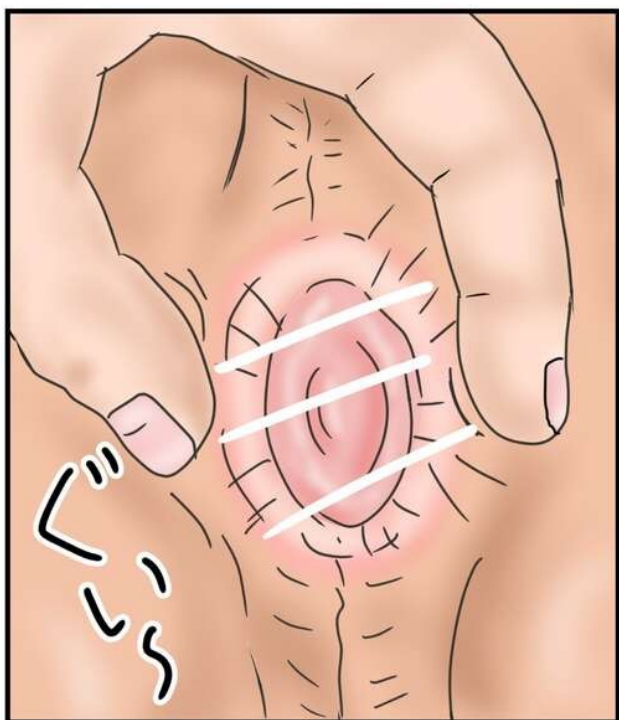
スゲー！雄星、
わき毛生えてる
大人じゃん！

ついでに
チンチンの
毛も見せてよ！

雄星君
今日もちんこ
見せて〜！



ボ、ボクが…雄星の処女を奪う…
ボクの初体験の相手が雄星…
ハアハア…



ボクみたいな、なんの取り柄も無い…
そして粗チンの補欠メンバーが…
4番の雄星のケツに…

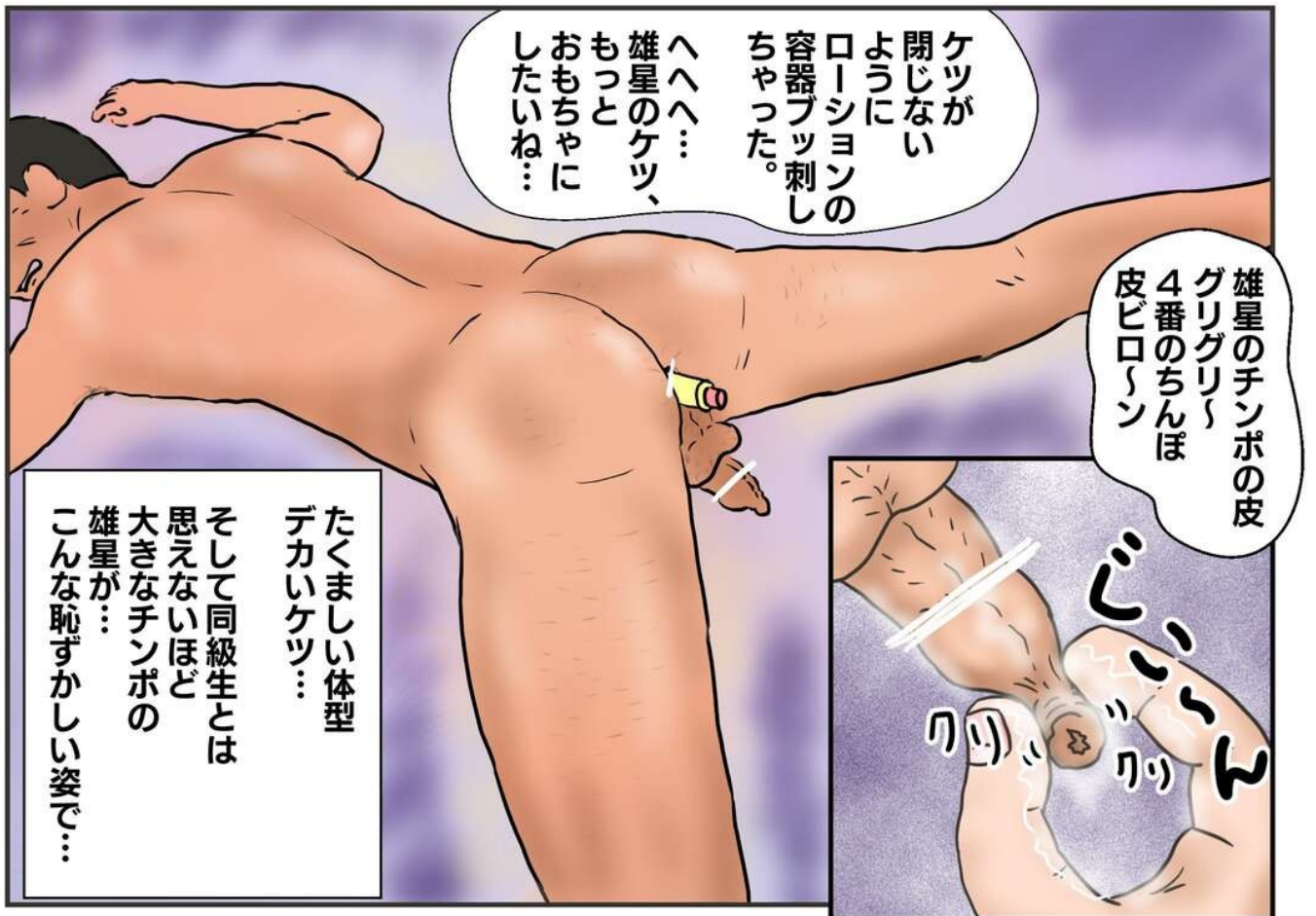


ダメだ…しゃぶるのは
わけが違う…
そんなことしたらダメだ…

ほら、もう指3本ズボズボ…
指を全部…いや、これなら
バットも突っ込めるくらい
ガバガバに出来るね…



ああ…雄星の
ケツが…



たくましい体型
デカイケツ...
そして同級生とは思えないほど
大きなチンポの
雄星が...
こんな恥ずかしい姿で...





恥辱の野球部♂夜這い悪戯②

特別☆付録 中3翔太 他中からの恥辱

ここはいいたい…
そして、翔太の身に何が…

なんだ…？
ここどこだ…
う…動けない…

え？
さむい…
オレ、もしかして裸？

スター選手
県内、野球少年たちの間で
知らない者はいないほど
有名選手の翔太

目隠しされ、手足を縛られ、
自分がどんな姿で
晒されているかすら
分らず、そして
どこにいるのかすら
知ることが出来ない。

南国球児

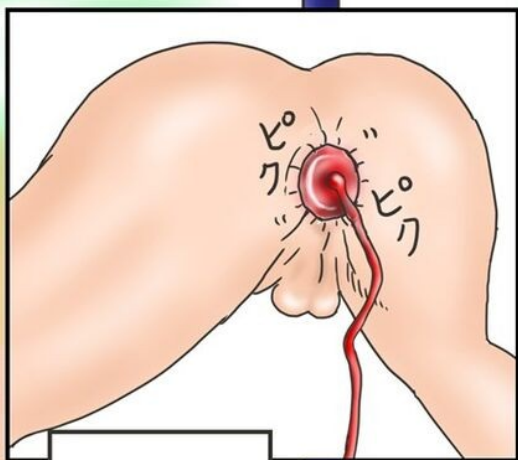
翔太のお尻には
かなり大きめのサイズの
アナルプラグ型バイブが
はめられていた。

肛門が…
お尻の穴が…
な…なんか入ってる…

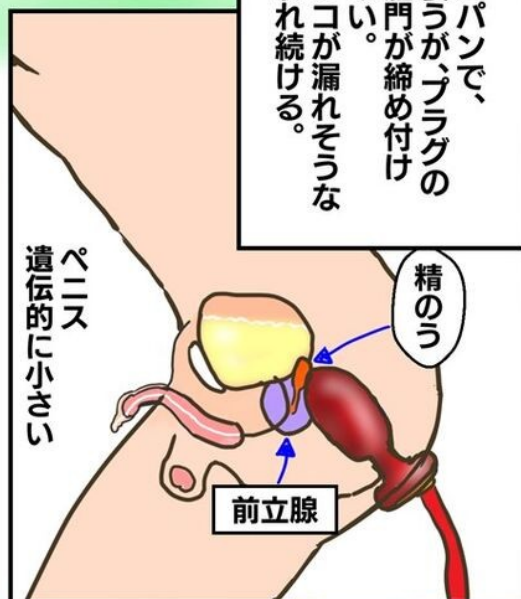
ヤバイ…
シッコも漏れそう

う…うんこ
漏れそう…？
でもなんか違う…

直腸がパンパンで、
排便感が襲うがプラグの
くびれを肛門が締め付け
排出できない。
ずっとウンコが漏れそうな
感覚に襲われ続ける。



排出したくても
肛門の締りが
良すぎるのである。
ヒクヒクしても
すぐに戻ってしまう。



アナルプラグ型バイブは
前立腺だけでなく、
精のうにも触れている。
さらに膀胱は尿でばんばんだ。
この状態でバイブの
スイッチを押されたら…
だた、目隠しされた翔太には
そんなことなど分るはずもない。

目隠しされ、何も見えず、
状況が把握出来ない。
ただ、裸で、どこか外に
晒されている
という事だけは分った。

グラウンドの土と芝生の
匂いがする。

直腸内を圧迫する物体、
押し広げられた肛門…
排便感と共に、
尿意も限界が来ていた…
そんなとき、遠くからさわぎ声が近づく。
聞き慣れない声だが、
どうやら同じ、中学生のようである。

おい！見ろよ！
だれか縛られてるぞ！

スゲー！
パンツ一丁かよ！

その知らない中学生達の
さわぎ声によって、
翔太は、自分の状況を
把握したのだった。

誰か来た…！
た、助けて…
ああ…でも見ないで…
恥ずかしい…いやだ…

おい！みんな来い！
スゲー！パンツ一丁だぜ！

いったいコイツ
なにやらかしたんだよ…

すげえ…！
おい、誰かハサミもってこい、
パンツ脱がすぞ！



おい！
これって、大石中の
翔太じゃねえか？

わきも、チンコモツルツルじゃん！
これがあの大石中の翔太なわけ
無いじゃん！絶対別人だろ！

て言うか、ちんぽ…
小っちゃすぎだろ！
これがあの大石中だったら
幻滅だぜ！

誰か、目隠し取って
顔を確かめろ！
ぜったい
大石中の翔太だって！

すっげえ
デベソ！

パイパン！
わき毛も
ツルツルって…

そんな…
オレのこと知ってる？
イヤだ…
目隠し取らないで…
顔は見られたくない…

フーッ

パンツの中に
紙入ってたぜ…

ちんこ本体の竿より
余った皮の先つちよの
方が長いじゃん…

見ろよこの皮…
どうやったら
こんなに伸びるんだ？
絶対、伸してるだろ
超ヘンタイだぜ…

おい！誰か止めろよ！
絶対、イジメだろ！
可哀想だろ！

黙れ！

マジで皮なげえ…

『皮、伸してます♡
今は3cmですが、
目標5cmです！
引っ張って下さい。』
だってよ！

少年たちの集団心理とは
恐ろしいものだ…
これが、大石中のキャプテン
翔太だと気付きつつ、
このいじめ、恥辱プレイに
ハマっていくのである。

すげえ！ケツに
ぶっといのハマってるぜ！
抜けねえ…
肛門がヒクヒクして
超エロい…

これ、オレの
腕より太いぜ。
ケツの穴って
こんなに開くのかよ…

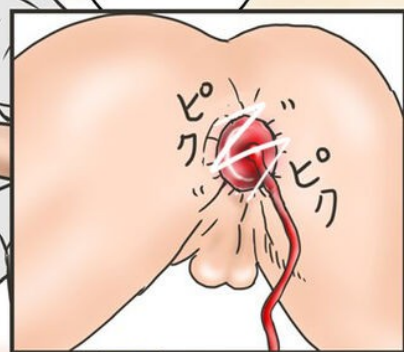
痛い！イタイ!!
やめて！
ちぎれる！
ヤメテ！

おい、ヤメロって！
引っ張りすぎだろ！
ちぎれたら
どうすんだよ!!

いや、逆に気持ち良くて
息が荒くなってるぜ！
皮引っ張られて
喜んでるぜ…へへへ…
超おもしろ

おい！見ろ！
スゲえ！スゲえ
伸びる!!

ちんちん、小っちゃえ…
これが、あの大中の
翔太くんかよ…



そしてついに、
バイブのスイッチが
押された

その振動は、まず初めに
パンパンに溜った
膀胱のおしっこを
刺激したのである…

ペニス
遺伝的に小さい

精のう

前立腺

スイッチ
オン！



これ、大石中の
翔太だろ？
すげえ…！
全裸で
シヨン便
漏らしてるし

ああ！あああ！
だめ！とめて！
ああ！ヤメテ！
漏れる！
漏れる！！

シヨンベンをお漏らしする姿を見られ、
翔太の中で、何かが消失するのを感じた。
もう、終わった…
もうどうなったっていい…
そんな気分になるのであったが…
これで終わるわけなど無いのだ…

手にかかったじゃねえか！
マジで…コイツ…
タダじゃおかねえ…

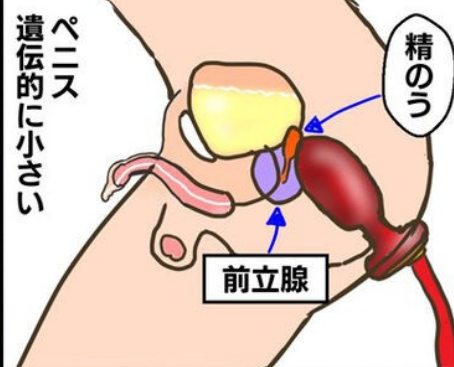
うわ！汚ねえ！
コイツ、突然
シヨンベン漏らし
やがった！

ビィ
ビィ

びしゃへ

ビィ
ビィ

全てのシヨンベンを出し切り、終わったと思っただのが間違だった。そう…巨大なパイプは容赦なく前立腺を刺激し、そして精のうを押しつけるのだ。



あ…ああ…頭が変な感じ…なんかおかしい…ああ…キモチいい…イヤだ…ああ…恥ずかしい…のに…

小学校時代から顔見知りの翔太に対し、罪悪感を感じつつ、性的な魅力を放つ翔太の美しい裸体を恥辱する欲求を抑えられずにいた。

すげえ！ケツがすごい勢いでヒクヒクし始めた！



おい、勃起して来てるぜ！

こんな状況で感じてるって、ヘンタイかよ…

オレ、大石中の翔太、めっちゃくちゃ大ファンだったのに幻滅したぜ…

勃起したペニスより余った皮の方が長いぜ…超みっともねえ…

おい見ろ！金玉が無くなってる！

おつ今度は勃起して来た。フル勃起したらどんくらいだ…え？…もしかしてコレがフル勃起か…？

やべえ…調子に乗ってさっき皮伸しすぎたか…？翔太、ごめん…

これでフル勃起か？オレの小指より小っちゃいぜ笑笑

ああ…ケツの奥が…
キモチイイ…
やばい…
ああ…やばい…
イク！イク！！



フィニッシュは
突然訪れた！
これまでに経験のない
快感が込み上げ、
手を触れずに
射精してしまったのである

うわっ！
口に入った！

て言うか…
飲んじまった…

ぴちゃ

なんの罪も無い
翔太を恥辱した
少年には
天罰が下った

完